代々木病院の理念

ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

発行　医療法人財団 東京勤労者医療会　1部60円
〒151―0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷1―30―7
TEL03(3404)7661
E-mail address　yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

東日本大震災

被災地で、首都圏で、支援活動

不安な日々を過ごす被災者に長期的な支援を

東京勤労者医療会（以下、勤医会）は、東日本大震災の被災地・被災者にむけ義援金をつのり、支援活動を行い、支援物資を送っています。

塩釜市（宮城県）の坂総合病院では、全日本民主医療機関連合会（以下、民医連）の職員が、毎日150～200名体制で支援活動を行っています。勤医会も医師、看護師、リハビリのスタッフ、放射線技師、事務などを送り、坂総合病院の救急外来の支援や、地域の患者さん・避難所めぐりを行っています。

■代々木病院のスタッフのレポート

◇坂総合病院の救急外来には、避難所の劣悪な生活環境から喘息や感染症を発症した方が多く来られました。換気・手洗いなど、限られた手段でいかに健康を守るか、公衆衛生学的視点が必要と感じました。〈今川篤子医師、（3月26日、坂総合病院の救急外来を支援）〉

◇体調についての問いかけにほとんどの人が「大丈夫、大丈夫」とこたえるが、血圧を測ってみると高かったり、「実はぜんぜん眠れていないんだよね」と相談を受けたりしました。また、涙を流しながら「本当にありがとう。外の人と話して世の中とつながっている」と実感している人もいました。〈木村高一郎診療放射線技師、（3月26日～27日、八幡地区・七ヶ浜の避難所を訪問）〉

◇私の行った避難所には認知症や障害のある人はほとんどいませんでした。避難所で生活するにはトイレも自立していないと厳しそうでした。そういう方たちのための福祉避難所の必要性を感じました。〈木藤素子理学療法士、（3月26日～28日、城南小学校、多賀城文化センターなどを訪問）〉

■駅頭カンパで支援の輪ひろがる

3月17日17時30分から18時30分まで、代々木病院と代々木歯科を中心とした東京勤労者医療会の都内の事業所と代々木総合法律事務所の職員約80名が参加し代々木駅で義援金をつのりました。

風が冷たく寒さに震えながらも、参加者が代々木駅の全ての出口（東口、西口、北口）で立ち、「被災地への義援金をお願いします！　我々の仲間も現地に支援に向かっています！」と呼びかけると、若い人たちも足をとめてお金を義援金箱に入れてくれました。

通りかかった親子（母、娘2人）から「いわき市から避難してきました。（わたしたちのために）ありがとうございます」と言われ、義援金をうったえる声にも力がこもりました。

さらに、通り過ぎても「代々木病院です」の声に反応し、戻ってきてお金を入れてくれる人たちもいました。

1時間足らずで21万円を超える金額となり、亡くなられた方や被災された方にたいする人々の熱い思いを強く感じました。

お預かりした義援金は民医連を通じて、被災者・被災した自治体・民医連加盟の被災した事業所などに送られています。また民医連による支援物資などの購入にあてられ役立てられています。

4月18日現在、患者さんや職員、駅頭カンパなどで集められた義援金の額は150万円に達しています。みなさん、ご協力いただき本当にありがとうございます。

これからも代々木病院をはじめ勤医会の各院所では、支援を行っていきます。今後ともご協力をお願いします。

本震から1カ月以上が経過しテレビや新聞は徐々に震災以前の状態になりつつあります。しかし被災者は苦しみ、疲れ切っています。

被災者が1日でも早く自分達の暮らしに戻るためには、国・県・市町村などの自治体のはたす役割がとても重要になっています。被災者の気持ちに寄りそい、この震災の惨状を胸にきざみ続けることが、長期的な支援につながっていくのではないでしょうか。

（関連記事3面）

津波により電柱にたてかけられた車と、三島共立病院から支援に来た小高賢治さん（多賀城市八幡）

（→）玄関先で血圧測定（七ケ浜町）

全国の仲間が坂総合病院で打ち合わせ

支援の報告をする今川篤子医師

現地の様子を伝える木村高一郎診療放射線技師（左）と木藤素子理学療法士（右）

仕事帰りに多くの職員が義援金を呼びかけました（代々木駅）

津波によってがれきすら流されてしまった住宅地（七ケ浜町）

この2階で工員が3月11日の午後4時から12日の8時まで、鉄骨につかまり波がひくのを待っていた（石巻港、高橋力夫氏撮影）

手術台

いま誰も言いようのない苛立ちと無力感と疲労を感じている。これは目に見える地震・津波災害と立ち向かう時と違う次元のものである。個人では対処も逃げることも出来ず、じわじわと確実に迫る。放射能被害とはそういうものである。気晴らししようにも花見も観光旅行も学会も自粛・中止である▼核戦争による世界終末は誰でもイメージ出来たが、原発事故で同じストーリーが始まる想定は多くの人になかったからである。何をしても身が入らない日々である。それでも陽は昇り花は咲き、子は育つ。歩みを止めるわけにはいかない。止めてしまえばこの災害による死者たちに申し開きが立たない。足引きずって歩きながら新しいヒトへと脱皮・進化しない限り未来はない▼地球環境の保全のためにもっと不便さを選ぶことにもなろう。このルールは世界中で守らねば意味ない。そのリーダーシップを取る、さすれば日本は栄光と自信を取り戻し、この大災害を乗り越えたことになる。頭を挙げ胸を張ろう！（ま）